

未利用魚加工販売・サツキマス陸上養殖

美波の遊休施設有効活用

美波町にサテライトオフィス(SO)を構える三井共同建設コンサルタント(東京)の社員濱隆博さん(54)は熊本県天草市出身。町の遊休施設を活用し、市場に流通しにくい未利用魚の加工販売や屋外水槽を使ったサツキマスの陸上養殖に取り組んでいる。

施設は、同町志和岐の志和岐漁港近くの木造平屋280平方メートルを敷地595平方メートル。2020年12月ごろまでアワビの中間育成施設として利用されていたが、指定管理者だった志和岐漁協が東由岐、西由岐両漁協と21年1月に合併して以降、使われていなかった。

三井コンサルは藻場再生事業の一環として、地元漁業者と連携して藻場の食害を引き起こすとされるアイゴを捕獲し商品開発などを行ってきた。濱さんはアイゴの仕入れ

東京のコンサルSO社員

「地域再生のモデルに」



加工する魚の種類をアイゴを含めて約30種類まで広げ、販路拡大を狙う。



【上】澄海が指定管理を引き受けた施設
【下】町の遊休施設を活用した未利用魚の加工作業。いずれも美波町志和岐

1月30日には、屋外に放置されている。重さ1・5キロを目標に育て、4月中旬に県産サーモンとして出荷する予定だ。横2メートルの水槽6基を活用しよう。海陽町浅川の県有種苗生産施設からアメゴ約700匹を運び込み、サツキマスとして陸上養殖を始めた。水槽によって海水の酸素濃度をいきたい。地域再生のビジネスを変えたり油分の異なる飼料をスモデルになるよう責任を持って取り組む」と話した。(宮本大輔、島袋健太郎)